

「黄疸発症前に発見された胆道癌」

肝臓から排出される黄色の消化液（胆汁）は、肝臓から胆管に排出され、胆嚢にためられる。食事をすると胆嚢が収縮して胆管を通して十二指腸に排出される（図1）。この経路に癌が発生すると胆汁が体内に貯留して黄疸を発症する（閉塞性黄疸）。これらの胆道系に発生した癌は、黄疸が発症してから発見されるのが通常である。黄疸が発症する前に診断された胆道癌の患者さんを紹介する。

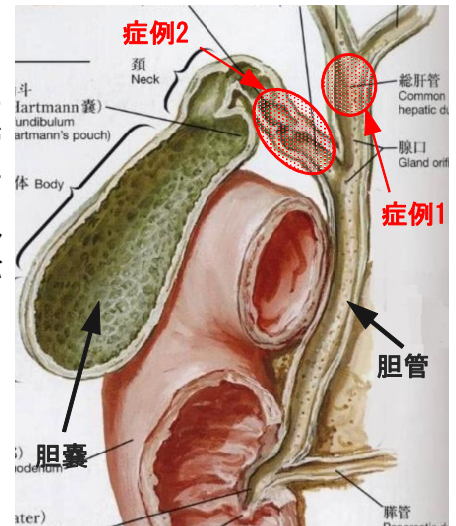


図1

※患者さん1 79歳男性

H22.5.10、食欲不振と体重減少を訴えて近医を受診。血液検査で肝機能障害あり（ γ -GTP 2184、ALP 1971と上昇するも、総ビリルビンは0.9と正常）、当院へ紹介された。MRCP（MRIによる胆道検査）を施行すると総胆管に変形あり、胆道癌が疑われた（図2）。名大外科へ紹介した。精査の上胆道癌が確認された。



図2

※患者さん2 76歳男性

近医で糖尿病、高血圧で加療中であったが、H22.4.1の血液検査で軽度の肝機能異常あり（ γ -GTP 194、GOT 52、GPT 174、しかし総ビリルビンは0.4と上昇なし）、当院へ紹介された。MRCPを施行すると胆道系に狭窄の疑いあり（図3）。1ヶ月後に再検するも同様の所見を認めた。この間に肝機能検査はまったく正常化していた。経静脈性排泄性胆道造影CTを行った。



図3



図4

胆嚢は造影されず、胆管には同様の狭窄所見を認めた（図4）。胆嚢管の癌が疑われ、名大外科へ紹介した。

今回紹介した2名の方は、通常なら黄疸を発症してから発見されるのが殆どの部位に癌が発生したが、比較的早期にMRCPで異常が発見できた方であった。肝機能障害が軽くても、このような大変な病態がかくれている可能性があることを、常に留意しておくことが必要であることを教えてくれた貴重な患者さんであった。